

# 日本人大学生におけるラジオ聴取と孤独感の関連

## Associations between listening to the radio and loneliness in Japanese college students

堀内 聡・金広 智樹・隈元 慧人

HORIUCHI Satoshi, KANEHIRO Tomoki and KUMAMOTO Keito

Loneliness refers to the discrepancy between achieved and desired levels of social interaction with others. This study examined associations of listening to radio with loneliness in Japanese college students. The hypothesis investigated was: Compared to Japanese college students who did not listen to radio, those who listened would show lower scores on loneliness. Ninety-eight college students completed a set of questionnaires which measured listening to radio, loneliness, and control variables (social support, social skills, and demographics). Loneliness was measured in two ways. One was to ask how often the respondent feels lonely. The other was to assess how weak social interaction with others the respondent had. Data of 91 students was subject to analyses. Listening radio was found not to be associated with loneliness which was assessed through weakness of social interaction, but was significantly associated with increased not decreased loneliness. These results have suggested that associations of listening to radio with loneliness are more complex than reported ever.

### 問題と目的

日常生活の中で個人が行っている孤独感に対する効果的な対処行動を明らかにすることは重要な研究課題である。孤独感の定義は様々なものが提唱されており、統一的な見解はまだない<sup>(1)(2)</sup>。本研究では、Peplau & Perlman<sup>(3)</sup>にもとづいて、孤独感を実際の社会的相互作用の水準が望んでいる水準に満たない状態であると定義する。孤独感健康やパフォーマンスに関連することが示されている。例えば、孤独感が高い人は、そうでない人と比較して、抑うつと不安が高く<sup>(4)</sup>、喫煙する可能性が高く<sup>(5)</sup>、学生においては学業成績が低い傾向がある<sup>(6)</sup>。わが国では、孤独感を感じている人は一定数存在する<sup>(7)(8)</sup>。例えば、わが国の18歳以上の成人2000名を調査したStickleyら<sup>(8)</sup>によれば、40%以上の成人が孤独を感じていた。2021年2月には、孤独・孤立の問題に対して対策を推進するため、内閣官房に孤独・孤立対策担当室が設置された。

孤独感に対して個人がどのように対処しているかについては、これまでに一定数の研究が蓄積されている。これらの研究は大きく2つのアプローチに分けられる。1つは、特定の対処行動に着目するアプローチである<sup>(9)</sup>。もう1つは、個人が行っている対処行動の構造を検討するアプローチである<sup>(10)</sup>。例えば、諸井<sup>(10)</sup>は、日本人男子学生が行っている39の対処行動を対象に因子分析を行い、7つの因子を見出している。例えば、本研究に関連するものとして、“一人でショッピングをする”、“一人で何かを食べる”、“一人でラジオを聴く”、および“一人でテレビを見る”などの6つの対処行動

は「娯楽的活動」とまとめられている。両者のアプローチは相補的なものであると考えられる。前者のアプローチは孤独感の低さに関連する具体的な余暇活動を明らかにするという点で意義がある。

ところで、近年、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために「新しい生活様式」が提案され、私たちの生活は大きく変化した。このような中、ラジオを視聴する人が増えている。株式会社ビデオリサーチ<sup>(11)</sup>によれば、新型コロナウイルス感染症の発生による生活行動の変化としてラジオを聴く時間が増えた人は、男女12から69才全体で約1割にのぼった。性と年代ごとにもみると、男性10代、女性10代では1割以上増えている。なかでも女性10代は、一般的にはラジオをあまり聴かない層であるが、最近アイドルやタレントがラジオパーソナリティを務める番組も増え、そういった番組を楽しむにラジオを聴く機会が増えているのかもしれない。

では、ラジオ聴取は孤独感の低さとどのくらい関連するのであろうか。Peplau & Perlman<sup>(3)</sup>は、孤独感に対処する方法として、社会的相互作用の水準を高める方法、望む水準を下げる方法、両者のずれが生じた際に生じる不快体験を緩和する方法をあげている。ラジオ聴取はラジオパーソナリティの声を聴くという面が間接的に社会的相互作用の水準を高める方法になりえる。また、実際と望んでいる社会的相互作用の程度にずれが生じた際に生じる不快体験を緩和する方法にもなりえる。

これまで、ラジオ聴取と孤独感の関連については、4つの研究で検討されている。Hugeliusら<sup>(9)</sup>は、地震災害の被災者を対象として、被災者に情報と音楽を提供することを目的とする災害ラジオを実施した際の孤独感の変化を検討した。フォーカスグループと個人面接によるインタビュー調査の結果、災害ラジオによって提供された音楽は、被災者の孤独感を和らげる効果が示唆された。Stessmanら<sup>(12)</sup>は、エルサレムに住んでいる70歳の高齢者の孤独感を規定する要因を検討した。検討された要因の中にラジオ聴取も含まれていた。ラジオ聴取は孤独感の高さと関連していなかった。Teh & Tey<sup>(13)</sup>は、中国人高齢者を対象として、テレビ視聴／ラジオ聴取と孤独感を検討している。その結果、テレビ視聴／ラジオ聴取を行っている人は、そうではない人と比較して、孤独感が低いことが明らかになった。Austin<sup>(14)</sup>は、アメリカ人大学生を対象としてラジオ聴取と孤独感の関連を検討した。その結果、ラジオ聴取と孤独感が強くは関連しないことを見出し ( $r = -.09$ )、大学生において、ラジオ聴取と孤独感は無関係と結論している。

これまでのところ、大学生を対象としている例はAustinのみである。孤独感についてはライフステージ間で質的な差異があることが指摘されている<sup>(15)</sup>。孤独感は無関係と称され、孤独感を感じることはこの時期の特徴でもある<sup>(16)</sup>。落合<sup>(16)</sup>によれば、対人関係において理想を求めると、自我を発見し始めること、広い時間的展望の中に自分を位置づけられないことという特徴によって、青年期は孤独感が生じやすい。また、孤独感の高さには文化差が報告されている。日本人大学生とアメリカ人大学生の孤独感を比較したPearl & Klopff<sup>(17)</sup>は、アメリカ人大学生と比較して、日本人大学生の孤独感が高いことを報告している。そのため、Austinの知見を青年期の日本人に拡張できるかは不明である。したがって、青年期の日本人において、ラジオ聴取と孤独感の関連に関する知見を蓄積することは意義がある。

また、Austinは、孤独感の測定に改訂版UCLA孤独感尺度<sup>(18)</sup>を利用している。この尺度には、孤独という表現を利用していない、社会的相互作用の状況への認識を尋ねているといった特徴がある<sup>(19)</sup>。日本語版UCLA孤独感尺度（第3版）<sup>(19)</sup>の項目例として、“話し相手がいると感じますか”、“他人との関わりは意味がないと感じることがありますか”がある。これらはいずれも「孤独」という表現を用いず、回答者の社会的相互作用の状況を尋ねている。しかし、「孤独である」という認識は、ラジオ聴取との関連を検討する上で重要かもしれない。「孤独である」という認識は、実際の社会的相互作用の水準が望んでいる水準にいたらない状況において生じる不快体験であると考えられる。ラジオ聴取がこのような状況の不快体験の緩和を目的として行われるならば、ラジオ聴取は孤独

感の低さと関連を示す可能性がある。実際、上述のStessmanらとTeh & Teyは参加者の「孤独である」という認識から評価された孤独感を測定している。Stessmanらではラジオ聴取と孤独感の間に関連はなかったが、Teh & Teyではラジオ聴取と孤独感の低さが関連していた。大学生を対象として、ラジオ聴取と「孤独である」という認識から評価された孤独感およびUCLA孤独感尺度で測定された孤独感の関連を同時に検討した例はない。この点を検討することによって、ラジオ聴取と孤独感の関連についての包括的な理解が促進されるであろう。

本研究では、日本人大学生を対象として、ラジオ聴取と孤独感の関連を検討することを目的とする。本研究を行うにあたり、Teh & TeyとAustinにもとづいて以下の仮説を立てた。本研究では、通りの方法で孤独感を測定する。

仮説 日本人大学生において、ラジオ聴取をしていない大学生と比較して、ラジオ聴取をしている大学生は孤独感が低い。

## 方法

### 研究参加者と手続き

令和4年12月に中国地方の4年制私立大学に通う1年生から4年生98名を対象に、Google Formsを利用した調査を行った。同大学で開講されている心理学関係の授業2つにおいて、授業担当者の承諾を得た上で授業後に参加者の募集を行った。研究者が研究の趣旨・実施方法について文書および口頭で説明した後、受講生にGoogle Forms上の調査票へ繋がるQRコードを配布した。参加に同意した受講生に調査へ回答してもらった。回答の不備があった7名を除く91名が分析対象となった。サンプルサイズについては、主たる分析である重回帰分析における独立変数の数にもとづいて、目標値を60に設定し、これを超えるようにデータを収集した。重回帰分析のサンプルサイズについて、1つの独立変数に対して10以上のサンプルが必要であるという指摘<sup>(20)</sup>がある。この指摘にもとづくと、本研究の場合、独立変数は後述するように6つであるため60以上のサンプルが必要になる。

### 倫理的配慮

本研究は倫理委員会の承認を受けていない。実際の調査に際しては、研究の主旨等の説明を書面と口頭で十分に行った上で同意を得た。調査票の表紙の教示文において、調査の概要、調査の目的、回答内容、調査が自由意思による調査であること、回答の拒否によって不利益は一切生じないこと、調査結果は学会等で公表する可能性があることを明記した。書面上に記載された説明を読んだ上で、研究参加に同意する人には“同意する”，同意しない人には“同意しない”に○をするよう求めた。なお、調査に参加したくない人が退室しやすいよう、調査が自由意思によるものであること、授業の成績には関係がないことを繰り返し説明し、研究に参加したくない人は退出するように促す配慮を行った。

### 調査項目

ソーシャル・サポート<sup>(21)</sup>およびソーシャルスキル<sup>(22)</sup>は、孤独感と比較的一貫して関連することが示されている。そのため、調査項目に含めることとした。

**属性** 年齢、性別、学年、同居者の有無の回答を求めた。

**孤独感** 内閣官房孤独・孤立対策担当室<sup>(7)</sup>と同じ項目を利用して、孤独感を2通りの方法で測定した。1つ目は、「あなたはどの程度、孤独であると感じることがありますか。」という質問項目に対して回答を求めた。回答は5件法（1：決してない — 5：しばしばある・常にある）である。また、2つ目は、日本語版UCLA孤独感尺度（第3版）<sup>(19)</sup>から抽出された3項目である。「あなたは、自分

につきあいがないと感じる場合がありますか。」などの3項目に対して回答を4件法（1：決してない—4：常にある）で求めた。

ラジオ聴取 調査内容としては、「ラジオを普段視聴しますか。」に対して、「はい」か「いいえ」で回答を求めた。

ソーシャル・サポート ソーシャル・サポートは岩佐ら<sup>(23)</sup>が開発した日本語版ソーシャル・サポート尺度によって測定した。この尺度は12項目で構成されている。回答は7件法（1：全くそう思わない—7：非常にそう思う）である。12項目の平均点を算出した。得点が高いほど、ソーシャル・サポートが多いことを示す。

ソーシャルスキル ソーシャルスキルは、菊池<sup>(24)</sup>が開発したKiss-18（Kikuchi's Social Skill Scale・18項目版）によって測定した。この尺度は、18項目で構成されている。項目例としては、「他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか。」がある。回答は、5件法（1：いつもそうでない—5：いつもそうだ）である。18項目の合計点を算出した。得点が高いほど、ソーシャルスキルが多いことを示す。

## 分析方法

統計解析はSPSS for Windows version 28で行った。有意水準は $p < .05$ に設定した。まず参加者の属性と記述統計量を算出した（Table 1）。次に、変数間の相関係数を算出した（Table 2）。その上で、ラジオ聴取の有無と孤独感の関連を検討するために重回帰分析を2通り実施した。いずれも独立変数は性別（女性=0, 男性=1）、年齢、同居者の有無（なし=0, あり=1）、ソーシャル・サポート、ソーシャルスキル、およびラジオ聴取の有無（なし=0, あり=1）であった。従属変数は、1つ目の分析は「孤独である」という認識から評価された孤独感、2つ目の分析はUCLA孤独感尺度から抽出された3項目で測定された孤独感であった。

## 結 果

### 参加者の属性、記述統計量および相関係数

Table 1に参加者の属性を示す。性別構成は、男性が42名（46.2%）、女性49名（53.8%）であった。年齢は平均19.4歳（標準偏差1.16）であった。学年構成は1年生が46名（50.5%）、2年生が39名（42.9%）、3年生が5名（5.5%）、および4年生が1名（1.1%）であった。同居者の有無については、同居者がいる人は76名（83.5%）、同居者がいない人は15名（16.5%）であった。ラジオ聴取をしている人は14名（15.4%）、していない人は77名（84.6%）であった。Table 1に各変数の記述統計量を示す。「あなたはどの程度、孤独であると感じることがありますか。」という質問項目に対して「しばしばある・常にある」と回答した参加者の割合を算出した。男性が5名（11.9%）、女性が5名（10.2%）であった。同じく、UCLA孤独感尺度から抽出した3項目の合計点が10点以上であった参加者の割合を算出した。男性は11名（26.2%）、女性は10名（20.4%）であった。Table 2に変数間の相関係数を示す。

Table 1 参加者の属性と記述統計量

属性	N (%) または平均±標準偏差
性別	
男性	42 (46.2)
女性	49 (53.8)
年齢	19.4 ± 1.16
学年	
1年生	46 (50.5)
2年生	39 (42.9)
3年生	5 (5.5)
4年生	1 (1.1)
同居者の有無	
あり	15 (16.5)
なし	76 (83.5)
ラジオ聴取の有無	
あり	14 (15.4)
なし	77 (84.6)
ソーシャル・サポート	5.34 ± 1.16
ソーシャルスキル	56.77 ± 13.7
孤独感	
「孤独である」という認識で測定された孤独感 <sup>a</sup>	3.04 ± 1.05
UCLA孤独感尺度の3項目で測定した孤独感	7.99 ± 2.12

<sup>a</sup>「あなたはどの程度、孤独であると感じることがありますか。」という質問項目で測定した。

Table 2 各変数の平均および標準偏差と各変数間の相関係数

変数	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.
1. 性別 (女性 = 0, 男性 = 1)							
2. 年齢	.13						
3. 同居者の有無 (なし = 0, あり = 1)	.06	.06					
4. ソーシャル・サポート	-.07	-.14	-.03				
5. ソーシャルスキル	.23*	-.03	.18	.41**			
6. ラジオ聴取の有無 (なし = 0, あり = 1)	.09	-.02	.11	.21*	.08		
7. 「孤独である」という認識で 測定された孤独感 <sup>a</sup>	-.10	.20	-.24*	-.42**	-.20	.07	
8. UCLA孤独感尺度の3項目で 測定した孤独感 <sup>b</sup>	-.11	.11	-.14	-.42**	-.46**	-.03	.68**

<sup>a</sup>「あなたはどの程度、孤独であると感じることがありますか。」という質問項目で測定した。

### ラジオ聴取と「孤独である」という認識から評価された孤独感の関連

Table 3に「孤独である」という認識から評価された孤独感を従属変数、性別（女性 = 0，男性 = 1），年齢，同居者の有無（なし = 0，あり = 1），ソーシャル・サポート，ソーシャルスキル，およびラジオ聴取の有無（なし = 0，あり = 1）を独立変数とする重回帰分析の結果を示す。変数の投入は強制法であった。ラジオ聴取の有無と孤独感との間に有意な関連性が認められた（ $\beta = .22$ ,  $p = .02$ ）。ラジオ聴取をしている人は、そうでない人と比較して、「孤独である」という認識から評価

された孤独感が強かった。また、同居者の有無 ( $\beta = -.29, p = .00$ ) およびソーシャル・サポート ( $\beta = -.49, p = .00$ ) と孤独感との間に有意な関連性が認められた。同居者がいる人は、同居者がいない人と比較して、「孤独である」という認識から評価された孤独感が弱かった。ソーシャル・サポートが多い人は、そうでない人と比較して、「孤独である」という認識から評価された孤独感が弱かった。他方、性別 ( $\beta = -.18, p = .06$ )、年齢 ( $\beta = .18, p = .05$ )、およびソーシャルスキル ( $\beta = .08, p = .44$ ) と孤独感との間に有意な関連性が認められなかった。

ラジオ聴取の有無とUCLA孤独感尺度から抽出した3項目で測定された孤独感の関連

Table 4にUCLA孤独感尺度から抽出した3項目で測定された孤独感を従属変数、性別(女性=0, 男性=1)、年齢、同居者の有無(なし=0, あり=1)、ソーシャル・サポート、ソーシャルスキル、およびラジオ聴取の有無(なし=0, あり=1)を独立変数とする重回帰分析の結果を示す。変数の投入は強制法であった。ソーシャル・サポート ( $\beta = -.32, p = .00$ ) およびソーシャルスキル ( $\beta = -.30, p = .00$ ) とUCLA孤独感尺度から抽出した3項目で測定された孤独感との間に有意な関連性が認められた。ソーシャル・サポートが多い人は、そうでない人と比較して、孤独感が弱かった。ソーシャルスキルが多い人は、そうでない人と比較して、孤独感が弱かった。他方、性別 ( $\beta = -.08, p = .43$ )、年齢 ( $\beta = .07, p = .45$ )、同居者の有無 ( $\beta = -.11, p = .24$ )、およびラジオ聴取の有無 ( $\beta = .09, p = .37$ ) とUCLA孤独感尺度から抽出した3項目で測定された孤独感との間に有意な関連性が認められなかった。

Table 3 「孤独である」という認識で測定された孤独感を従属変数とする重回帰分析の結果

独立変数	偏回帰係数	p値
性別 (女性=0, 男性=1)	-.18	.06
年齢	.18	.05
同居者の有無 (なし=0, あり=1)	-.29	.00
ソーシャル・サポート	-.49	.00
ソーシャルスキル	.08	.44
ラジオ聴取 (なし=0, あり=1)	.22	.02

Table 4 UCLA孤独感尺度で測定された孤独感を従属変数とする重回帰分析の結果

独立変数	偏回帰係数	p値
性別 (女性=0, 男性=1)	-.08	.43
年齢	.07	.45
同居者の有無 (なし=0, あり=1)	-.11	.24
ソーシャル・サポート	-.32	.00
ソーシャルスキル	-.30	.00
ラジオ聴取 (なし=0, あり=1)	.09	.37

## 考 察

本研究の目的は、大学生を対象として、ラジオ聴取と孤独感の関連を検討することであった。分析対象者は91名の大学生であった。まず参加者の孤独感の高さを内閣官房孤独・孤立対策担当室<sup>(7)</sup>における16から19歳の結果と比較する。内閣官房孤独・孤立対策担当室によれば、「あなたはどの程度、孤独であると感じることがありますか。」という質問項目に対して「しばしばある・常にある」と回答した男性は4.3%、女性は2.7%であった。また、UCLA孤独感尺度から抽出した3項目の合計点が10点以上であった男性は7.0%、女性は3.2%であった。本研究の参加者は「しばしばある・常にある」と回答した男性は11.9%、女性は10.2%、UCLA孤独感尺度から抽出した3項目の合計点が10点以上であった男性は26.2%、女性は20.4%であった。したがって、本研究の参加者は内閣官房孤独・孤立対策担当室における16から19歳の参加者と比較して、孤独感が強かった。

“日本人大学生において、ラジオ聴取をしていない大学生と比較して、ラジオ聴取をしている大学生は孤独感が低い。”という仮説は支持されなかった。ラジオ聴取の有無は「孤独である」という認識から評価された孤独感とは関連していたものの、仮説とは関連の方向性が反対であった。すなわち、ラジオ聴取をしている大学生は、そうでない大学生と比較して、「孤独である」という認識から評価された孤独感が強かった。他方、ラジオ聴取の有無はUCLA孤独感尺度から抽出された3項目によって測定された孤独感とは有意に関連していなかった。

本研究の知見は、以下の3点において、大学生におけるラジオ聴取と孤独感の関連についての新しい知見をもたらすものである。第1に、本研究の結果は、ラジオ聴取と孤独感の関連が孤独感の測定法によって異なることを示している。これまでの先行研究は、孤独感が「孤独である」という認識として測定されているか、UCLA孤独感尺度で測定されているかのいずれかであった。本研究は「孤独である」という認識を測定する項目とUCLA孤独感尺度から抽出した3項目を併用した。そのうえで、ラジオ聴取と2種類の孤独感の関連が異なることを示すことができた。

第2に、本研究の知見と先行研究の知見<sup>(12)(13)</sup>から、ラジオ聴取と「孤独である」という認識から評価された孤独感の関連が複雑な様相を示すことを示唆することができた。本研究では、ラジオ聴取をしている大学生は、そうでない大学生と比較して、「孤独である」という認識から評価された孤独感が強いことをはじめて見出した。この知見は、興味深いことに、ラジオ聴取をしている中国人高齢者の孤独感が弱いことを報告したTeh & Teyとエルサレム在住の高齢者においてラジオ聴取と孤独感の関連性がないことを報告したStessmanらのいずれとも一致しないものであった。本研究、Teh & Tey、およびStessmanらの一貫しない知見は、ラジオ聴取と「孤独である」という認識から測定された孤独感が単純な関連ではないことを示唆している。

他方、ラジオ聴取をしていない大学生と比較して、ラジオ聴取をしている大学生の「孤独である」という認識で評価された孤独感が強かった理由は不明である。以下に2つの可能性を仮説として提示する。1つはラジオ聴取が孤独であるという認識を高める行動であるという仮説である。ラジオ聴取によって人間関係の希薄さがいっそう認識され、「孤独である」という感覚が増強された可能性がある。他方、UCLA孤独感尺度によって測定される孤独感は主に社会的相互作用の状況を測定しているために、その認識が顕著には増強されないのかもしれない。

もう一つの仮説としては、孤独を認識することがラジオを聴取するきっかけになるという可能性がある。「孤独である」と認識する場合、それに伴う不快な感情を回避するため、孤独感の緩和に向けた行動をとる可能性が考えられる。諸井はラジオ聴取を含めた「娯乐的活動」がストレスに対する情動焦点型コーピングと類似していると述べている。ストレスとはストレス反応を生じさせる状況のことであり、ストレス反応とはストレスサーにともなって生じる情緒的、認知行動的、身体的

反応のことである<sup>(25)</sup>。コーピングはストレスに対する対処のことであり、情動焦点型コーピングはストレスによって生じたネガティブ情動を緩和するものである<sup>(25)</sup>。ネガティブ情動が強い人は、そうでない人と比較して、情動焦点型コーピングを多く利用しているという知見<sup>(26)</sup>もある。O'Brienら<sup>(26)</sup>の知見を孤独感に対する対処としてのラジオ聴取に当てはめると、孤独感に伴ってネガティブ情動が高くなるが、それを緩和することを意図した情動焦点型コーピングとしてラジオ聴取をするという可能性が考えられる。

第3に、本研究の知見は、ラジオ聴取の有無は改訂版UCLA孤独感尺度によって測定された孤独感とは関連しないというAustinの結論を拡張するものである。本研究では、ラジオ聴取とUCLA孤独感尺度から抽出された孤独感の間に有意な相関係数が認められなかった。この相関係数が有意ではない点は、Austinの結果とは一致しない。しかし、両変数の相関係数はAustinが $r = -.09$ 、本研究が $r = -.03$ であり、相関係数自体は大きくかけ離れてはいない。サンプル数はAustinが $n = 493$ 、本研究が $n = 91$ であるため、このサンプルサイズの差がp値の差となった可能性がある。Austinがアメリカ人大学生を対象としているのに対して、本研究は日本人大学生を対象としている。日本人とアメリカ人大学生の孤独感の強さに違いがある<sup>(17)</sup>。このような文化差がある中で、本研究ではAustinの結論と一致する知見を得た。したがって、本研究の知見はAustinの結論が日本人大学生にも拡張できることを示している。そのため、大学生においては、ラジオ聴取がUCLA孤独感尺度によって測定される孤独感と強くは関連しない可能性が強まった。

以下に本研究の限界と課題を述べる。本研究は横断的研究であるため、ラジオ聴取と2種類の孤独感の関連について、その因果関係については言及できない。ラジオ聴取をしている大学生は、そうでない大学生と比較して、孤独感が強い理由として2つの解釈を仮説として提示したが、その妥当性を検討するためには実験的研究が必要である。また、本研究のサンプルは中国地方の私立大学1校に通学する大学生であった。本研究の参加者は、内閣官房孤独・孤立対策担当室における16から19歳の結果と比較すると孤独感が高い集団であるという特徴がある。今後は、本研究の知見が多様な集団でも追認できるかを検討する必要がある。さらに、「孤独である」という認識を1項目で測定した。全国調査と比較するために本項目を利用したが、同項目は心理測定学的な検証が行われておらず、信頼性と妥当性の水準が十分であるかは不明である。今後は、本研究の結果をもとに孤独感の測定法についても検証を行う必要がある。

## 引用文献

- (1) 広沢 俊宗 孤独感に関する心理学的研究(1) —課題と展望— 関西国際大学研究紀要, 12, 145-152, 2011.
- (2) Tzouvara, V., Papadopoulos, C., & Randhawa, G. A narrative review of the theoretical foundations of loneliness. *British Journal of Community Nursing*, 20(7), 329-334, 2015.
- (3) Peplau, L. A., & Perlman, D. Blueprint for a social psychological theory of loneliness. In M. Cook & G. Wilson (Eds.), *Love and attraction* (pp. 99-108). Oxford, England: Pergamon, 1979.
- (4) Wu, J., Wu, Y., & Tian, Y. Temporal associations among loneliness, anxiety, and depression during the COVID-19 pandemic period. *Stress and Health*, 38(1), 90-101, 2022.
- (5) McClure-Thomas, C., Lim, C., Sebayang, S., Fausiah, F., Gouda, H., & Leung, J. Perceived loneliness, peer, and parental relationship with smoking: A cross-sectional analysis of adolescents across south-east Asia. *Asia-Pacific Journal of Public Health*, 34(8), 770-777, 2022.
- (6) Alinejad, V., Parizad, N., Yarmohammadi, M., & Radfar, M. Loneliness and academic performance



- mediates the relationship between fear of missing out and smartphone addiction among Iranian university students. *BMC Psychiatry*, 22(1), 550, 2022.
- (7) 内閣官房孤独・孤立対策担当室 令和3年人々のつながりに関する基礎調査結果, 2022.
  - (8) Stickley, A., Matsubayashi, T., & Ueda, M. Loneliness and COVID-19 preventive behaviours among Japanese adults. *Journal of Public Health*, 43(1), 53-60, 2021.
  - (9) Hugelius, K., Gifford, M., Ortenwall, P., & Adolfsson, A. "To silence the deafening silence": Survivor's needs and experiences of the impact of disaster radio for their recovery after a natural disaster. *International Emergency Nursing*, 28, 8-13, 2016.
  - (10) 諸井 克英 大学生における孤独感と対処方略 実験社会心理学研究, 29(2), 141-151, 1989.
  - (11) 株式会社ビデオリサーチ 新たな生活環境下でラジオリスナーが増加傾向～ラジオ聴取人数データ×生活者データによるリスナーの特徴とは～ 株式会社ビデオリサーチ, 2022. Retrieved from <https://www.videor.co.jp/press/2020/200625.html> (2022年5月9日)
  - (12) Stessman, J., Ginsberg, G., Klein, M., Hammerman-Rozenberg, R., Friedman, R., & Cohen, A. Determinants of loneliness in Jerusalem's 70-year-old population. *Israel Journal of Medical Sciences*, 32(8), 639-648, 1996.
  - (13) Teh, J. K. L., & Tey, N. P. Effects of selected leisure activities on preventing loneliness among older Chinese. *SSM - Population Health*, 9, 100479, 2019.
  - (14) Austin B. A. Loneliness and use of six mass media among college students. *Psychological Reports*, 56(1), 323-327, 1985.
  - (15) 落合 良行 孤独感の内包的構造に関する仮説 教育心理学研究, 30(3), 233-238, 1982.
  - (16) 落合 良行 孤独感に関する実証的研究の現状 青年心理学研究, 1, 17-24, 1987.
  - (17) Pearl, T., & Klopff, D. W. Loneliness among Japanese and American college students. *Psychological Reports*, 67(1), 49-50, 1990.
  - (18) Russell, D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. The revised UCLA Loneliness Scale: concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39(3), 472-480, 1980.
  - (19) 舛田 ゆづり・田高 悦子・臺 有桂 高齢者における日本語版UCLA孤独感尺度(第3版)の開発とその信頼性・妥当性の検討 日本地域看護学会誌, 15(1), 25-32, 2012.
  - (20) Harrell, F. E., Jr, Lee, K. L., Califf, R. M., Pryor, D. B., & Rosati, R. A. Regression modelling strategies for improved prognostic prediction. *Statistics in Medicine*, 3(2), 143-152, 1984.
  - (21) Huang, H., Wan, X., Liang, Y., Zhang, Y., Peng, Q., Ding, Y., Lu, G., & Chen, C. Correlations between social support and loneliness, self-esteem, and resilience among left-behind children in mainland China: A meta-analysis. *Frontiers in Psychiatry*, 13, 874905, 2022.
  - (22) 相川 充 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 社会心理学研究, 14(2), 95-105, 1999.
  - (23) 岩佐 一・権藤 恭之・増井 幸恵・稲垣 宏樹・河合 千恵子・大塚 理加・小川 まどか・高山 緑・蘭 牟田 洋美・鈴木 隆雄 日本語版「ソーシャル・サポート尺度」の信頼性ならびに妥当性—中高年者を対象とした検討 厚生の指標, 54(6), 26-33, 2007.
  - (24) 菊池 章夫 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル 川島書店, 1988.
  - (25) Lazarus, R. S., & Folkman, S. Stress, appraisal, and coping. New York: Springer, 1984.
  - (26) O'Brien, A., Terry, D. J., & Jimmieson, N. L. Negative affectivity and responses to work stressors: an experimental study. *Anxiety, Stress, and Coping*, 21(1), 55-83, 2008.

## 謝 辞

本論文は第2著者と第3著者が令和4年度に比治山大学現代文化学部提出した卒業論文を修正したものです。

〈キーワード〉

ラジオ聴取, 孤独感, 大学生, 社会的相互作用, 自覚された孤独感

堀内 聡 (現代文化学部社会臨床心理学科)

金広 智樹 (現代文化学部社会臨床心理学科)

隈元 慧人 (現代文化学部社会臨床心理学科)

(2023. 10. 24 受理)